

# 大陸（中支）

## 歩兵第二百十連隊

### 中支作戦に生還して（二）

福井県 柏谷 富二雄

〔承前〕

私は大正八（一九一九）年二月一日生まれ。昭和十六（一九四一）年十二月八日、学徒動員第一回の「繰り上げ卒業」により、昭和十六年十二月、明治大学商学部を卒業、昭和十七年二月、福井県鯖江の歩兵第三十六連隊歩兵砲中隊（藤岡隊）に入隊した。同期新入隊員五十人位だった。

三カ月の短期教育期間も終わり、昭和十七年七月、鯖江駅を出発、広島経由、宇品港を輸送船で

中支安慶に向け出港した。

この日から、私の嵐第六二二部隊歩兵砲中隊（第十六師団歩兵第二百十連隊歩兵砲中隊）での戦務が始まった。その後、連隊は昭和十七年十月、大別山作戦参加、昭和十八年七月常德作戦、昭和十九年四月湘桂作戦、昭和二十年四月、湖西（洞庭湖西方、芷江）作戦と続いたのである。この作戦で我が兵団、我が連隊は多大の犠牲者を出しているのである。

一 東流駐屯の嵐第六二二部隊歩兵砲中隊  
— 岡田隊く永井隊 —

岡田隊は福知山からきた兵隊と合流し百人位の陣容になった。兵舎の左斜めに連隊本部の衛兵所

があり、右側の厩には中隊用の馬が三十頭位收容されていた。馬は兵器である。駄載用の馬なしに砲中隊の作戦行動はできない。

ここで初年兵教育が始まった。演習教育担当者の西村弥寿男軍曹は体格抜群の人で、演習中標悍で頭を叩かれた兵隊は沢山いる筈である。午前六時起床、点呼、午後九時消灯、点呼で、大陸での野戦第一線生活が始まった。

起床、点呼が終わると、厩へ行って馬の手入れである。私は原隊で馬の手入れをやって来ているので、今日現在では何の苦もなく馴れたものになっていた。中隊事務所の背後の連隊本部の左後方台上には連隊の厩があり、百頭位の戦馬が收容されていた。

初年兵教育の演習は、この駐屯地内外で実施された。野戦でもあり、訳の分からぬリンチ沙汰もなかった。野戦は私にとって内地の原隊より当然開放的であり、凌ぎ易かった。

一週間に一度位は官給品の支給があり、煙草は

「旭光」「パレス」など日本軍の戦利品か、美味であった。たまには内地からの慰問袋も届いた。この地に駐屯中、敵襲は一度もなく平穏な第一線であったが、以前はチヨイチヨイ敵襲があつて、この辺も安穩ではなかったという。

日本には「七生報国」という愛国心の至情を表現する言葉があるが、かかる愛国心は日本だけのものではない。かつての敵襲時、敵は「七生報国」の幟を捧持し、当時の肉弾三勇士的奮戦ぶりは、敵ながら天晴れ、決して侮るべきものでないこのことを、その場で諭してくれた。生の戦陣訓であった。

三カ月の野戦における教育を終え、しばらく経過した頃、幹部候補生の試験を受けるよう再三勸奨されたが、戦勝の帰趨も判然とせず、既に原隊で兵で行くことを決心している以上、勸奨の行為は内心謝しながらもお断りした。幹部候補生を避けて数カ月後、支那語教育を受けよということ、六カ月ばかり永井隊を離れ通訊要員として第一二

○連隊第五歩兵中隊の駐屯する洪家舗に向向することとなった。

私の一時離隊と時を同じくして、永井隊はどこか作戦行動に出るらしく隊内も慌ただしかった。

## 二 支那語教育隊洪家舗において

連隊の各中隊から一人ずつ通訳要員が出向し、洪家舗に会したのは三十人位であった。教官は田原兵長であった。さすがに現地で生の中国語を話しているだけに上手だった。一期の教育が終了する頃、片言位話せるようになって永井隊へ戻ったが、中隊は貴池県池州に移駐していた。

支那語教育隊は第五歩兵中隊と兵舎を異にして、同一地域にあつたため、歩兵中隊の苦勞も手に取るように知らされた。敵と当面する最前線であるため、終始敵襲と覚しき兆候が頻発し、常に緊張のとけることはない。

ある日、夜中に突然機関銃の音に教育隊一同色めき立った。中隊兵舎に向け打ち込まれている。

まさしく敵の夜襲である。初めての恐怖のためか、ガタガタ歯が震えて止まらぬ。歩兵中隊の彼らは馴れたもので、そのうち銃弾の飛び交いも収まり、夜明けとともに鎮圧して帰隊した。白昼も一回敵襲を受けた。ちょうどその時、私は歩哨に立っていた。敵は歩哨の私を狙撃せんとし、弾丸は私の立っていた石畳の石を直撃し、私の目の前にコロコロ転がっていた。もう一步横に私が立っていたら、目の前に転がった弾は私の体のどこかに当たって、今やおだぶつというところ。危機一髪で助かった。

小銃隊の諸君は馬はなく身軽だが、砲中隊より常に危険にさらされていることを実地に体験した。六カ月の教育を終え、中隊へ復帰した。江岸を上がり約一キロ石畳を行き、城門を入り、さらに一キロ位行くと連隊本部がある。その地域内の歩兵砲中隊・永井隊に帰隊した。

### 三 貴池県池州において

連隊長・和爾基隆殿が、夕暮れ、点呼を過ぎ、馬上豊かに本部付き将校二人とともに散策と覺しき風姿を思い出すことがある。ここでの野戦生活は、洪家舗のそれと違って、敵襲もなく平凡であった。

私はここで一度炊事当番についた。炊事当番もよいところであるが、飯炊きの火着け役の方で困惑したことがある。また馬牛の枯れ草集めも、私は彼らほど手早く行かず、いつも申し訳程度でお茶を濁した。

このような平凡な野戦生活のうちに、永井砲中隊は老屋鮑家へ再び移駐した。老屋鮑家は池州東北三キロ位だったと思うが、池州城外東北方に地形が開けている。沼沢を舟で渡って行くとそこが老屋鮑家であった。何の変哲もない寒村である。家屋も数十軒で山羊がいたことが思い出される。

### 四 紙坊（ツーフアン）において

紙坊滞留は数カ月と思うが、近く大作戦に参加、進発するとのことで、隊内は準備に大わらわである。炊事は上原兵長を首班に「常」という別当がいて、よく立ち働いていた。「常」というのは元国民政府軍の兵隊で、作戦間もどこまでもついて行った。

昭和十九年六月、衡陽作戦の行動命令が下り、私も初めて大作戦に参加することとなった。どこをどう經由して衡陽攻略に参じたものか定かではないが、衡陽作戦に従軍の思い出を、次に述べたい。

### 五 衡陽作戦において

嵐第一二〇連隊砲中隊長・永井忠衛氏の指揮する隊員一同は、六月の末、紙坊の駐屯地を出発、軍公路上に出た。連隊砲の次に速射砲、その次に大隊砲が延々と続いて進発した。

衡陽へ、衡陽へと、衡陽こそ湖南省の宝庫とも

言うべき敵の大要塞であった。それでこそ中支那派遣軍がほとんどこの作戦行動に参加した。戦死者も衡陽攻略において屍を重ね、歩兵中隊などは全滅に近い中隊もあった。

我々砲中隊の永井中隊ですら短剣で突入するなどの瀬戸際まで追いやられることもあった。下痢のため目は窪み、野戦病院は病院とは名ばかり、医薬補給の途絶のため負傷者の治療にも事欠き、負傷個所の腐敗に任せていたという惨状をも呈した。

川には敵軍の死体が転がり、悪臭鼻をついて、呼吸もつけない場合も幾度かあった。

飛行機は飛ぶといえども敵機ばかり。ボーイングなど大編隊でやって来る。急降下したと見るや、バリバリ、銃弾は屋根裏を貫き机の上板を貫き、土間にコロコロ、手にして見れば、その銃弾は日本のそれとは三倍位の大きさ。こんなものがこの勢いで身体に当たったらたまったものでないと、つくづく考えさせられる。

私は習得した中国語を話すために、老屋鮑家に駐屯している間、極力外出に務め、中国良民と接触に務めた。ビストルを腰にぶら下げ、ほとんど毎日外出し、中隊兵舎前の人民公社で保長と親しくし、中隊の所要の件は主としてここで調弁した。

ある日、駄馬を手入れ中に馬が暴れ出し、手綱を離すまいとして坊子の角に胸を打ち、骨折はしなかったが、それがもとで発熱し、食事もとれなくなった。疲れに乗じてマラリアが出て一向に快方に向かわず、梅田衛生兵が打ってくれた注射が、打ち損ったか右手が麻痺してしばらく困った。

病状は昂進し、私は担架に乗せられ、池州連隊本部医務室に運ばれた。一週間ばかり静養していたが、快方に向かわず歩行困難となり、大通の野戦病院に入院することになった。

幸い六カ月で退院することができた。この間、永井隊は常德作戦に進攻し、大島軍曹以下数人の戦死者を出して紙坊に移駐していることを知り、そこへ帰隊した。

夕暮れともなれば、最寄りの丘台上で歩兵中隊が眼前の敵に対して最後の突撃を試みている。隊長以下白たすきを掛け、敵、味方の夜間判別を識るための出で立ちである。歩兵中隊などは、出発当時五十人以上でも、衡陽並びに衡陽付近では、機関銃と五人になつてしまい、文字通り一個中隊全滅したところもある。歩兵のお役目柄とはいえないの毒である。しかし彼らが行つてなお衡陽が落城しないなら、我々もまた短剣にて突撃自刃あるのみである。

青空用便も弾丸が飛んで来るので、一カ所にじつと落ち着いていられない。その姿勢のまま凹みへと移動し、やつと用を足す。弾丸雨霰という言葉を実感で受け止める。

しかしこの環境になれるとまた、度胸がついたというか、小銃弾位は平気になつてしまう。恐怖は、あの爆音と銃撃である。日本飛行機の銃撃は音が小さいので、さほどでもない。敵のそれに比較すれば豆を煎るような音である。大きさといい

炸裂の音といい、日本のそれとは全く恐怖において趣を異にする。飛行機ノイローゼの発生源はここから出生する。

和爾高地に在つて指揮を取つていた連隊長は双眼鏡で敵陣を視察中、銃弾に頭を打たれ戦死された。

飛行機からビラが撒かれた。一瞥したが真つ赤である。ほとんど赤インクの印刷で、よく見れば投降勧告である。「抵抗は無駄、武器を捨て投降せよ！日本内地は米軍のB29の爆撃で廃墟と化している」そして「廃墟と化した」という部分が赤で塗りつぶされていた。裏面には日本女性の花束を抱いた写真を掲載し「あなたの帰りをこの女性たちが待っている。早く投降した方がまだ」という趣旨の投降勧告文であった。

しかし我々はデマに惑わされるなど、この勧告文を破り捨てた。この勧告のビラを一枚でも秘蔵して祖国に持ち帰っているならば、元中支派遣軍

の最後の衡陽作戦の苦戦を物語る資料として、ここに提出、披瀝することができたのだが、残念である。

その後、数日にして衡陽は日本軍の手中に陥落したが、今にして思えば大局的には勝負は決まっていたのである。

そのうちに迫撃砲が飛び、弾着しだした。弾着地点はいずれも至近距離の砲陣地に落下し、命中も有り得る状況化に入っていた。ヒュルヒュルと音を聞いたと思うと、後方に落下し炸裂する。危険を感じ吉岡二等兵に一時、苦力の監視を依頼して砲陣地の右後方側面に数メートル前進して、チエッコ機関銃を据え、第一連続発射した。

我が方の四一式山砲は、殷々として山へこぼまし、敵陣地に命中か、敵銃弾がはたと止んだと思いきや、または敵の迫撃砲の砲弾が各所に落下する。砲弾はいましたが私のいた苦力の屯する吉岡君のいる個所に落下、吉岡君を含め、良民諸共戦死を遂げてしまった。

私が砲陣地まで前進し、機関銃を据え数分のことだった。時間にして五分位のことだったか、五分にして運命の神は、我と境を異にしてしまった。

決戦相つかぬまま薄暮となり山を下りたが、薄暮は対決に都合の良いチャンスだった。私は吉岡君の屍を山下にまで下して、衛生兵にその処置を依頼した。迫撃砲弾の炸裂は、彼の後頭部の大半を持ち去っていた。

衡陽近くで行軍中の落伍者を待たため、田中精一君と私が暫時民家に残り、さらに先発を追い隊列に入った。日本軍の主な集団が通過したらすぐ土匪が舞い戻り小集団への挑戦に取り掛かるのが通例である。日本軍の宣撫地域ではないので、良民の日本軍に対する敵愾心は旺盛である。油断は禁物である。

隊列が軍公路から砂地の丘に差し掛かった際、土匪と覚しき数人が打って出てきた。五、六人の敵が馬部隊のみと思って勝算をもって踊りかかっ

てきた。唐突のため一時混乱した。

田中兵長は小銃をもって一発威嚇射撃をした。素早くチェッコを肩から卸して、すすきのかすかな遮蔽を利しチェッコ機関銃を腰だめで打ちまくったが、敵の抵抗は強い。大隊砲の諸君が迫撃砲で打ち方が始まり、至近距離は百メートルである。さしもの彼らも叶わぬと見るや、退散、逃走である。

私はスキの群生から出て、砂地に遮蔽物のなきまま機関銃を据え、逃走土匪を狙い打ちした。土匪も撃ってきたが、射手の私が砂を被るほどだった。

ここでも命拾いをして、とんだ奇襲を避けることができた。これも危機一髪だった。

かくして本隊に追跡、合流したが、嵐第一二〇連隊に総攻撃の命令が下っていた。

かく対峙し、両軍死闘を繰り返し、旬日以上を費やして日本軍は強行突破して、衡陽を占領した。砲中隊は衡陽付近の街、宝慶の郊外に駐屯し、こ

こでの駐留生活に入った。衡陽作戦は終了したが、この人的犠牲は甚大なものだった。当中隊の戦死者も私の知悉しているだけでも屈指に価した。

記述の通り、歩兵中隊の犠牲は全滅に近いものは数多くあった。しかし歩兵砲中隊は中隊長永井忠衛氏の抜群の指揮力によつて、最小限に食い止めることのできたことは不幸中の幸いであった。

## 六 宝慶ばおちんにおいて

かくして宝慶に駐留した我々は、衡陽作戦での戦塵を洗っていたが、私に新たな命令が示達された。後藤少尉と共に桂林街道、祈陽へ馬糧蒐集へ出よということだった。後藤少尉殿と倉本上等兵、私ともう一人初年兵で追及してきたN君と一行四人であった。倉本上等兵は作戦の間に発見した迷子の中国人を連れていた。

桂林街道を山中、三日三晩行軍した。無事、祈陽に着き、一民家に居住し、翌朝九時、馬糧蒐集のため付近の民家からモミを集め、祈陽の野戦倉

庫に搬入した。

祈陽の街は相当な街だったが、良民は誰一人おらず空虚化していた。祈陽の街から遠く離れた部落で良民の協力を求め、四〇五キロ付近から搬入し、兵站線の確保に懸命だった。

本隊から離れ、その煩雑から解放され、衡陽作戦の疲労を回復するには充分だった。食糧は豊富だった。モミを生米にし、鮮魚は裏のクリークで、豚肉は馬糧蒐集のついでにということで、二週間が一カ月ともなり、衡陽作戦での戦塵を払拭した。そして元気を取り戻して宝慶に帰隊したが、しばらくして芷江作戦に出る出動命令が下った。

#### 七 芷江作戦において

本作戦は飛行機に悩まされ、昼間行動は許されないまでになっていた。展開するのは平野ではなく、山また山に阻まれ、袋小路に入って行くような薄気味悪い地形であった。

どの地点で折り返したか分明ではないが、薄暮

午後四時頃、民家に野営ということで装具を卸したが、裏山に民宿野営護衛のため、機関銃を据えよということ、中野一等兵を弾薬手として、二人で山に登った。

裏山の台上で、山の稜線に頭を出す者があったら、素早く打ち込む態勢に入っていた。気味が悪いので一発威嚇射撃をした。しばらくして中野一等兵が、私に山を下り退却しようと言言があったが、私はこれを拒否し、もう少しこのまま止まることにした。しかし何としても気味が悪い。

「中野、一步退却だ」ということで、山の下の土塀で造った小さな房子に入り、銃口を窓口に託して、山の稜線から下りてくる敵兵を邀撃することに方針を変えた。その時、永井隊長から「早く、早く」との伝言が届いた。裏山の陰に敵兵鈴なりということ、当中隊は薄暮を利用して反転作戦に転じたことを知った。

丘を下りて、平地の房子に入って銃口を据えたのと、反転退却の隊列は、ちょうど時を同じくし

ていた。房子の前を当中隊の通過と一致したのだから、この間のタイミングは人為的に作り出そうにも、そうざらに出るものではない。

人の姿、馬の姿が見えなくなるまで、時間にして十分位、あのまま当中隊が反転していなかったら、中隊諸共全滅か、捕虜かの瀬戸際だったかと思つて、ここでも危機一髪を免れた。盆地風の地形だけに、こんなところで夜襲に会つたら、砲中隊のように重火器部隊はたまつたものではない。

反転して全く犠牲もなく、虎口を脱し得た。そして薄暮は反転退却を助け、敵の追跡を振り切る事ができた。

正月は二月一日、連花の街に入った。旧正月として街は正月用の仕入品で氾濫していた。しかし街の人は一人もいなかった。一同久しぶりで、ゆっくり正月を味わつた。連花で歩哨にも立つたが、街を出ると小川が流れて、正面は山が続いていた。

反転作戦は奏功して、無事宝慶に帰り着いたが、敵の反攻は必死と予知され、この前提に基づく宝

慶における陣地構築の準備命令が発せられていた。

#### 【解説】

体験記執筆者は、福井県の鯖江第三十六連隊に入隊、現地では第一一六師団歩兵第一二〇連隊歩兵砲中隊の一員として配属された。

第一一六師団は、昭和十三年五月に、京都の留守部隊の第十六師団の担当で編成された師団である。

当初は歩兵第一〇九連隊（京都）、歩兵第一二〇連隊（福知山）、歩兵第一三三連隊（津）及び歩兵第一三八連隊（奈良）の四個の歩兵連隊による編成であったが、昭和十七年に改編が行われ、歩兵第一三八連隊は歩兵第二十六旅団に編入され、後に第三十一師団の所屬下に置かれていた。

編成後、師団は華中に進出し、武漢三鎮と南京を結ぶ揚子江沿岸の警備に従事している。さらに昭和十三年七月よりは杭州の、続いて南京

の警備を担当し、武漢攻略作戦には、所属の歩兵四個連隊を基幹として編成された石原支隊が作戦の主体となって参加した。

引き続き師団は華中の警備を担当し、太平洋戦争が開始された後も、引き続き中国大陸に駐屯して、中国の宣撫工作、警備に当たってきた。

体験記執筆者は、昭和十七年七月、このような戦歴と中国戦線を背景とする現地部隊に入隊しており、昭和十七年十二月の大別山作戦、同十八年七月の常德作戦に参加している。

昭和十九年になると、五月より昭和二十年一月にかけて行われた有名な大陸打通作戦の一部として作戦行動を行った湘桂作戦では衡陽攻略作戦に参加し、約四十日に及ぶ苦闘の作戦の中に組み込まれた。

この作戦において師団は多大なる損害を被りつつも、近代装備を持つ中国軍の抵抗を排除し

て衡陽の攻略に成功した。この作戦の経緯と、連日の雨中の作戦の労苦の体験は、多くの体験者によって語られている所であるが、その後師団は中国の飛行場破壊作戦に参加しつつ、湖南省にも進駐して、同地域の警備に当たっている。

体験記筆者は、これらの衡陽作戦を終えて安慶へ帰着し、長い戦塵を洗っていたものの、しばらくして芷江作戦出動の命令が下ったのである。筆者は連隊砲中隊の一兵卒として戦い、その戦況から見て戦死を予感しながら戦い、撤退して敵から離脱するなど、九死に一生を得て旧駐屯地安慶へ帰着している。

さらに追撃する敵に備え陣地構築工作中、毎日のごとく敵機の空爆、銃撃に悩まされ、この戦闘でも多数の上官や戦友を失い、自らも故郷への生還は不能であろうと覚悟していた、という。

とくに歩兵中隊の犠牲は全滅に近いもので、

筆者の所属した砲中隊は中隊長の抜群の指揮によって犠牲を最小限に食い止め得たことを記録している。

このようにして部隊は安慶に駐留しているころ、この宝慶において敗戦の詔勅を受けたのである。

「昭和二十年八月、われわれ歩兵第二百十連隊砲中隊は、中国湖南省衡陽郊外宝慶の一部落にあった」と記している。